

## 主の回復における唯一の働き

(木曜日——午前の第二の部)

メッセージ 2

### 主イエスの模範——キリストの人の生活と地上の務めとにおける働き

聖書：ヨハネ 1:18, 4:34, 5:19, 30, 6:57, 7:18, 14:9-11, 17:4

#### I. キリストの人の生活における働きは、主の回復における唯一の働きにあずかることを渴望しているすべての人の模範です——ピリピ 2:7-8：

##### A. 主イエスの人の生活は、彼の働きでした——ヨハネ 6:57 前半：

1. 人の生活におけるキリストについて言えば、生活と働きの違いはありませんでした。彼の生活は彼の働きであり、彼の働きは彼の生活でした——マルコ 1:14-45：
  - a. 主イエスは彼の働きを生きました。彼は彼の務めを生きました。
  - b. 彼について言えば、ただ一つのもの、すなわち彼の生活がありました。それが彼の働き、彼の務めでした——ルカ 4:42-43。
  - c. 主イエスはあらゆる所で、あらゆる時に働きました。なぜなら、彼の働きは彼の生活であり、彼の生活は彼の行動であり、彼の行動は彼の働きであったからです。
2. キリストの生活が彼の働きであったのと同じように、わたしたちクリスチャンの生活もわたしたちの働きであるべきです。わたしたちが必要とするのは、主のためのわたしたちの務めと符号する生活、主のためのわたしたちの奉仕の立場また支えとなる生活です——ヨハネ 6:57 後半, ガラテヤ 2:20, II コリント 6:3-11。

##### B. キリストは彼の人の生活において、人としての有り様で、さらには奴隷の形で見いだされました——ピリピ 2:7-8：

1. 主は人の生活において、人の有り様を建て上げ、奴隷の形を取りました。主のこの働きは、彼の務めの土台と背景でした——ルカ 4:14-19。
2. わたしたちは主に仕えることを渴望する者たちとして、行ないによるのではなく生活による働きを持って、今後わたしたちが主に仕えるための堅固な立場また強力な背景となる働きを建て上げる必要があります——使徒 16:1-3 前半, II テモテ 4:5, 11 後半, コロサイ 4:17。

##### C. 主イエスは彼の人の生活において、神を明らかに示す働きを完成しました——ヨハネ 1:18：

1. 彼の人の生活は、神を明らかに示しました。こういうわけで、主イエスの人の生活の中で他の人たちが見たものは、神が主イエスにおいて明らかに示されることでした——14:9-11。
2. もしわたしたちが今日、主に仕えようと渴望するなら、わたしたちの日常生活において、神を明らかに示す働きがあるべきです——ピリピ 1:20-21 前半。

- D. 主の人の生活における働きは、彼が御父を表現することを含んでいました。キリストはご自身を表現しませんでした。彼の人の生活において、彼を通して、御父が表現されました——ヨハネ 14:9, 7:17-18, 17:4 前半。
- E. 主イエスは彼の人の生活において、御父の事柄に心を配りました。人性において、神の子また人の子であるキリストは、御父の事柄、神の権益に心を配りました——ルカ 2:43-49。

**II. 主イエスは彼の地上の務めにおいて、御父が彼に行なわせようとして与えた働きを行ないました——ヨハネ 17:4 :**

- A. 主イエスは、彼の地上の務めにおいて福音を宣べ伝え (マルコ 1:14-15, 38, ルカ 4:18 前半)、人に仕え (マタイ 20:28 前半)、失われた者、罪人を尋ね出して救い (ルカ 19:1-10)、王国を宣べ伝え (マタイ 4:17, マルコ 1:15 前半)、王国の種をまき (マタイ 13:3, マルコ 4:3, 26-29)、真理を教えました (マタイ 7:28-29, ヨハネ 8:40, 45-46)。
- B. 主イエスは、彼の地上の務めにおいて御父と一であり、ご自身のために何の働きもなく、意志もなく、言葉もなく、栄光もなく、野心もありませんでした——5:43, 10:25, 3:34 前半, 14:24, 7:16-18, 12:47-50 :
1. キリストは御父と一であり、彼と御父が一であることを見せる生活をしました。彼が天の御父を見上げたことは、天の御父によって遣わされた地上の御子として、彼が御父と一であり、御父に信頼したことを示しました——10:30, 17:22, マタイ 14:19。
  2. 主イエスは御父を生きました——ヨハネ 6:57 前半 :
    - a. キリストは地上で単に御父によって、御父を通して生きただけでなく、御父のゆえに生きました。彼の生活には原因があり、その原因は御父でした——57 節前半。
    - b. 今日、キリストはわたしたちの日常生活の原因であるべきです。わたしたちは彼によって、彼を通して生きるだけでなく、彼のゆえに生きるべきです——57 節後半。
  3. 主イエスはご自分から何も行なうことがなく、常に自己を否みました——5:19, マタイ 16:24。
- C. キリストは彼の地上の務めにおいて、御父と共に働きました——ヨハネ 5:17 :
1. 主イエスは決して御父なしに何の働きも行なわず、常に御父と共に働きました。これは自己を絶対的に否むことを必要としました——マタイ 16:24。
  2. キリストは御父と共に働いたとき、彼と共におり彼の中におられる御父と共に働きました。御子キリストが地上で働いていたとき、御父が彼の中で生き、彼と共に働いていました——ヨハネ 14:9-11。
- D. 主イエスは御父の御名の中で働きました——10:25 :
1. 彼は御父の御名の中で来て、決してご自身の御名の中で何も行ないませんでした。彼はあらゆることを御父の御名の中で行ないました——5:43。
  2. 主イエスが御父の御名の中で働いたことは、彼が御父として働いたことを意味

しました。彼は御父とひとりのように働きました——10:30。

E. 主イエスは彼の働きにおいて、ご自身の意志を求めないで、彼を遣わした方のみこころを求めました——5:30：

1. 彼はご自身を否み、彼の考え、意図、目的を拒絶しました。
2. 彼は決してご自身のもの、またご自身のためのものを何も求めませんでした。彼はただ、彼を遣わした御父のみこころを求めました——6:38。
3. 主の食物は御父のみこころを行ない、彼のみわざを成し遂げることでした——4:34。
4. わたしたちは自分自身の目的を持つべきではありません。そうではなく、わたしたちはただ神のみこころを持つべきです——ローマ 12:2。

F. 主イエスは彼の地上の務めにおいて、決してご自身の言葉を語りませんでした。彼が語ったことは、御父が語ったことでした——ヨハネ 7:16, 18, 12:49-50, 14:10：

1. 彼はご自身の言葉を語るのではなく、神を語りました——1:18。
2. 彼が神の言葉を語ったとき、神が彼の語りかけを通して表現されました。神は彼の言葉を通して彼から出て来ました——7:17-18, 46。
3. 主イエスは神を語る生活、すなわち神の栄光のために神を表現する生活をしました——18 節。

G. 主イエスはこう言うことができました、「わたしは自分の栄光を求めない」——8:50：

1. 彼には自己の余地がありませんでした——マタイ 16:24。
2. 彼はご自身の栄光を求めないで、彼を遣わした御父の栄光を求めました——ヨハネ 7:18。

H. わたしたちが今日、主の回復における唯一の働きにあずかろうとするなら、わたしたちの自己は否まれ、わたしたちの目的は拒絶され、わたしたちの野心は放棄されなければなりません。さらに、わたしたちが知らなければならないことは、ただ主と共に働き、キリストにわたしたちの中で生きていただき、わたしたちの中で働いていただき、神の永遠の定められた御旨を成就していただくことです——12:24-26, ローマ 8:2, 29, ガラテヤ 2:20, エペソ 1:9, 3:11。

**務めからの抜粋：**

### キリストの人の生活と地上の務めとにおける働き

キリストは肉体と成ることを通して人に成り、地上で生きました。キリストが人に成るのに要した時間は、彼が宇宙を創造するのに要した時間よりはるかに長く、三十年間と九か月間を比べると、人の生活における彼の働きの時間は、人に成ることでの彼の働きの時間よりはるかに多かったです。三十年間、主イエスは人の生活において働いておられました。わたしたちは、創造主、永遠の神である彼が、なぜそのような長い期間を費やして地上で生きられたのかと思うかもしれません。新約の記録によれば、わたしたちは主がこの年月に何をしておられたのかをあまり見ません。わたし

たちには、彼はただ生きていただけで、全く何の働きもしていなかったように見えます。しかしながら、主イエスの人の生活は彼の働きでした。

人の生活におけるキリストには、生活と働きの違いはありませんでした。彼の生活は彼の働きであり、彼の働きは彼の生活でした。わたしたちは、主イエスは彼の働きを生き、彼の務めを生きと言ってよいでしょう。彼にはただ一つの事、すなわち彼の生活があり、それは彼の働き、彼の務めでした。彼は何を行なっても、何を語っても、どこへ行っても、すべて彼の生活と働きの一部でした。彼は絶えず生活し、働きました。こういうわけで、主イエスがどれほど働かれたかを言うことはできません。彼はあらゆる所で、あらゆる時に働きました。なぜなら、彼の働きは彼の生活であり、彼の生活は彼の行動であり、彼の行動は彼の働きであったからです。主イエスについて言えば、彼の生活のあらゆる面は同じでした。彼について言えば、生活と働きの区別はありませんでした。

キリストの生活が彼の働きであったのと同じように、わたしたちクリスチャンの生活もわたしたちの働きであるべきです。これはわたしたちが、主のための務めと符合する生活、主のための奉仕の立場また支えとなる生活を必要とすることを意味します。わたしたちはそのような生活を必要とするので、主に仕えることを願う人が、主の務めの中で彼にとって真に役に立つことができるのに長い年月がかかるのです。

### 人としての有り様で、さらには奴隷の形で見いだされる

キリストは人の生活の中で、人としての有り様で、さらには奴隷の形で見いだされました。パウロは、彼が「ご自身をむなしくし、奴隷の形を取り、人の姿になられて、人としての有り様で見いだされ、ご自身を低くして、死にまでも、しかも十字架の死に至るまでも従順になられました」と言います(ピリピ 2:7-8)。人の姿とは、彼の人性の外側の現れを意味します。彼は外側で人として人々に現れましたが、内側では神格の実際を持っておられました。さらに、キリストは人の姿になり、人性の状態の中へと入ったとき、人としての有り様で人に見いだされました。「有り様」という言葉は、外側の見かけ、外観を表徴します。キリストが人性の中で現したものは、人としての有り様で人に見いだされました。

ピリピ人への手紙第2章7節は、キリストは奴隷の形さえ取られたと言います。主イエスは肉体と成ることにおいて、彼の神聖な性質を変えたのではなく、神の形の外側の表現を(ピリピ 2:6)、奴隷の形に変えられました。これは本質の変化ではなく、状態の変化でした。

キリストは神の形を持つ神でしたが、人としての有り様にあるものとして人に見いだされました。もちろん、彼は肉体と成る前、人としての有り様にありませんでした。彼はただ神の形の中にありました。しかし彼は人と成った後、人の有り様を建てる方法で働き働いて、人としての有り様で人に見いだされる必要がありました。主イエスは三十年をかけて、そのような人の有り様を彼の人の生活において建て上げました。ですから、これは彼の人の生活における彼の働きの一部と考えられるべき

です。

主イエスは地上で彼の人性の中で生きていた時、働いて人の有り様を建て上げておられました。主は短い期間だけ人のように振る舞っていたのではありません。彼は人と成って、三十年間の人の生活をし、貧しく卑しい大工の家で生活されました。彼はそこで生活していた時、人の有り様を建て上げ、人としての有り様で見いだされました。ですから、主は人の有り様を建て上げるという大きな働きを完成されたのです。これが、彼が人の生活の初めの三十年間で行なっておられたことです。

パウロはピリピ人への手紙第2章で、キリストの人の生活について書いていた時、とても注意深かったのです。彼は疑いもなく、ピリピ人への手紙のこの部分をどのように組み立てるかをよくよく考えたでしょう。パウロは確かに正しい言葉を選んで、キリストが人としての有り様で見いだされ、奴隷の形を取られたと告げました。キリストは働いて、高く上げられた人や高い身分の人の有り様を建て上げたのではありませんでした。その反対に、彼は働いて、奴隷である人の有り様を建て上げたのです。主イエスがそのような低い身分の人の有り様を建て上げるのは容易な事ではありませんでした。これはとても細やかな働きであり、彼は三十年をかけて、それを完全に成し遂げられました。彼はこの働きを終えた後、出て来て彼の務めを開始されました。彼の務めは、ご自身の中で人の有り様を建て上げるという彼の働きに基づいていました。

人の生活におけるキリストの働きが、人の有り様を建て上げ、また奴隷の形を取ったことが彼の務めの土台と背景であったことであるのをわたしたちが見るのは、極めて重要です。主に仕えることを渴望する人は、行なうことによってではなく生きることによって、働きを持つ必要があります。これは、人の日常生活によって完成される働きです。主に仕えることを願う人は生きて、主への来たるべき奉仕のための堅固な土台と強力な背景となる働きを建て上げる必要があります。

### 神を明らかに示す

人の生活におけるキリストの働きの別の面は、神を明らかに示すことでした。「いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐におられるひとり子、この方だけが、父を明らかに示されたのである」(ヨハネ 1:18)。キリストは人の生活において、神を明らかに示されました。ヨハネによる福音書第1章1節から18節によれば、キリストが神を明らかに示されたのは、言(1、14節)、命(4節)、光(4-5節)、恵み(14、16、17節)、実際によってでした(14、17節)。言は表現された神であり、命は分け与えられた神であり、光は輝く神であり、恵みは享受された神であり、実際は実際化された神です。神はこの五つの事柄を通して、御子において明らかに示されました。いまだかつて、神を見た者はいませんが、キリストは彼の人の生活において、言、命、光、恵み、実際である方法で神を明らかに示されました。わたしたちが言を受け、神聖な命を持ち、命の光をわたしたちの内側に輝かせれば輝かせるほど、そして恵みとしての神を享受し、実際としての神を把握すればするほど、ますます彼はわたしたち

に明らかに示されます。キリストは人の生活において、このように神を明らかに示す働きを完成されました。キリストは三十年間の大工としての生活と働きの中で、神を明らかに示されました。彼は生活して人の有り様を建て上げているとき、彼の母、兄弟、姉妹たちに神を明らかに示しておられました。彼らは、彼の中に卓越した素晴らしいもの、単に人性の表現よりさらに高いものがあることを認識したに違いありません。彼らが主イエスの人の生活に見たものは、彼の中におられた神を明らかに示すことでした。彼の人の生活は神を明らかに示しました。

あなたは主に仕えたいなら、主のために大きな働きを行なおうすることから始めるべきではありません。これは神聖な原則に反します。あなたはただ神を明らかに示す生活を生きるべきです。その時、人はあなたの中に卓越したもの、神聖なものを見ましょう。これは、あなたの日常生活に神を明らかに示す働きがあることを示します。

わたしたちは新約を読むとき、主イエスは三十年間、日ごとに何を行っていたのかと思うかもしれません。ある意味で、彼は何もしておられませんでした。彼はただ生活しておられ、その生活は彼の唯一の働きであって、純粋な人の有り様を建て上げていたのです。主イエスはこのように建て上げていたので、出て来て務めをした時、ふりをしたり演技したりする必要はありませんでした。彼が故意に神・人、彼の中に神を持つ人のように振る舞おうとする必要はありませんでした。なぜなら、彼は純粋な人であり、人としての有り様で見いだされたからです。彼は真の人として、自然に神を明らかに示されました。彼は三年半の務めの前に、三十年間の準備の働きを完成されました。ですから、主イエスについて、三十年は準備の働きのためでした。その後、主イエスはわずか三年半の間、彼の務めにおいて神に用いられました。

### 御父を表現する

キリストの人の生活における働きは、御父を表現することも含みます(ヨハネ 14:9)。ヨハネによる福音書によれば、御子なるキリストは御父の御名の中で来て(5:43)、御父の御名の中で働き(10:25)、御父のみこころを行ない(6:38)、御父の言葉を語り(3:34 前半、14:24、7:16-17、12:47-50)、御父の栄光を求めました(7:18)。彼は御父と一でした(10:30)。彼にはご自身のための働き、意志、言葉、栄光、野心はありませんでした。そのような方として、キリストは御父だけを表現されました。彼はご自身を表現しませんでした。彼は御子でしたが、御父を表現しました。

御子のご自身ではなく御父を表現するので、御子の表現は御父の表現です。ですから、わたしたちは御子を見るとき、御父を見ます。これは、ヨハネによる福音書第14章の主イエスとピリポの会話によって証明されます。7節で主は弟子たちに、もし彼らが彼を知っていたなら、彼の御父をも知っていたはずであると指摘しました。そして彼は言われました、「今からあなたがたは彼を知る。そしてすでに彼を見たのである」。しかしながら、ピリポは答えました、「主よ、わたしたちに父を見せてください。そうすれば、わたしたちは満足します」(8節)。これに対してイエスは答えられ

ました、「わたしを見た者は父を見たのである。どうしてあなたは、『わたしたちに父を見せてください』と言うのか？」(9節)。御子の中で御父は表現され見られます。なぜなら御子は御父の表現であるからです。わたしたちが御子を見たなら、御父を見たのです。なぜなら、御父は御子の中に具体化され、彼を通して彼の人の生活において表現されるからです。

これは、主イエスが十二歳の時でさえそうでした。主は十二歳の時、人の子でした。しかし、ルカによる福音書第2章の記録を読むとき、この子供の中には神聖な要素があったことを見ます。神の属性はキリストの人の生活において表現されました。主イエスは純粋な人の生活を生きましたが、彼の人の生活の中に神聖な要素とある神聖な要因を見ます。この生活は人を表現しませんでした。それは父なる神を表現しました。

### 御父の事柄を顧みる

主イエスは彼の人の生活において、御父の事柄を顧みられました。ルカによる福音書第2章41節から51節は、彼が十二歳の時、神の權益を顧みられたことを啓示しています。42節は言います、「イエスが十二歳になられた時、彼らは祭りの慣例にしたがって上った」。十二歳の時、少年はユダヤ人によって「律法の子」と呼ばれ、初めて律法上の義務を課せられました(アルフォード)。十二という数はまた、神の行政における永遠の完全を表徴します。ですから、「十二歳」は、主イエスがここで行なったことが、完全に神の行政と関係があったことを示します。

43節から48節によれば、少年イエスはエルサレムに残っており、両親はそれに気づきませんでした。彼らはイエスが一行の中にいないことに気づき、エルサレムに戻って彼を捜しました。彼を見つけた時、彼の母は彼に言いました、「子よ、あなたはどうして、わたしたちをこんな目に遭わせたのですか？ ご覧、あなたのお父さんもわたしも、とても心配して、あなたを捜していたのです」(48節)。主は答えられました、「なぜ、わたしを捜しておられたのですか？ わたしがわたしの父の事の中にいなければならぬのを、ご存じなかったのですか？」(49節)。これは、少年イエスが神の權益を顧みておられたことを示します。49節の「わたしの父」という言葉は、イエスの神格を指し示します(ヨハネ5:18)。彼は人性において、彼の両親の子供でした。彼は神格において、父なる神の御子でした。ここでわたしたちは、主の二重の身分、神の御子と人の子としての彼の身分を見ます。人性において、神の御子また人の子であるキリストは、御父の事柄、神の權益を顧みられました。(新約の結論(5)、メッセージ64)

### 御父を生きる

ヨハネによる福音書第6章57節で、主イエスは御父のゆえに生きていたと言われました。キリストは地上で単に御父によって、御父を通して生きてだけでなく、御父のゆえに生きました。彼の生活には原因があり、その原因は御父でした。ですから、

御父は御子がそれを通して、またそれによって生きる単なる手段であるだけではありませんでした。そうではなく、御父は御子が地上で生きる原因でした。今日、キリストはわたしたちの日常生活の原因であるべきです。わたしたちは彼によって、彼を通して生きるだけでなく、彼のゆえに生きるべきです。彼はわたしたちの生きる原因であるべきです。そうでないと、わたしたちの生きることは無意味になるでしょう。原因としての御父がなければ、地上での三十三年半の御子の生活は空虚であったでしょう。しかし彼の生活は空虚ではありませんでした。なぜなら御子の生活は、御父を原因としていたからです。

### 御父と共に働く

ヨハネによる福音書第5章で、主イエスは無力な人を生かす働きを行ないました。宗教的なユダヤ人は彼を迫害しました。なぜなら、彼が安息日に無力な人を生かしたからです。彼は彼らに答えられました、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。だから、わたしも働いているのである」(5:17)。彼らの宗教的な観念では、彼らは安息して、彼らの安息日を守っていました。あわれな罪人が救われていない限り、御父と御子には安息がないことを、彼らは知りませんでした。宗教的なユダヤ人が彼らの安息日を守って安息していたとき、御父と御子は働いて、罪人が命を得て安息を持つことができるようにしておられました。

神の創造の働きは終わっていましたが(創2:1-3)、キリストの地上の務めにおいて、御父と御子はなおも贖いと建造のために働いておられました(ヨハネ5:19-20)。この働きは御子の命を与えることを含んでおり、それはヨハネによる福音書第5章で現されています。この事柄で、御父と御子は一です。御父が命を与える事柄において行ないたいことは何であれ、御子はそのとおりに行なわれます。

主イエスは決して御父なしに何の働きも行ないませんでした。彼は常に御父と共に働きました。これは自己を絶対的に否むことを必要としました。キリストはご自身を否んで御父と共に働きました。

主イエスは御父と共に働いたとき、御父の御名の中で働かれました(ヨハネ10:25)。彼は御父の御名の中で来て(ヨハネ5:43)、ご自分の御名の中では決して何も行なわれませんでした。彼はあらゆることを御父の御名の中で行なわれました。彼が御父の御名の中で働くことは、彼が御父として働かれたことを意味します。主イエスと御父は分離して働いていたわけではありません。その反対に、主イエスは御父と一として働いておられました。

キリストは御父と共に働いていたとき、ただ天におられる御父と共に働いただけでなく、彼と共におり、彼の中におられる御父と共に働かれました。キリストが御父と共に働かれることについてのこの真理は、御子が地上にいたとき、御父はただ天におられたと言う伝統的な教えに反しています。エコノミー的に、御子は地上におられ、御父は天におられました。しかしながら、本質的に、御子が地上で働いておられた時、御父は彼の中で生きており、彼と共に働いておられました。本質的に、御父と御



子は一です(ヨハネ 10:30)。彼らは分離されることはできません。ですから、キリストは御父と一である方法で、御父と共に働かれたのです。

### 御父の言葉を語る

主イエスは彼の地上の務めにおいて、決してご自身の言葉を語られませんでした。彼が語られたことは何であれ、御父が語ったことでした。一つの事例で彼は言われました、「わたしの教えはわたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものである」(ヨハネ 7:16)。主はご自身から語らないことで、ご自分の栄光を求めず、彼を遣わされた方の栄光を求めました(18節)。彼はご自身の言葉を語るのではなく、神を語りました。彼が神の言葉を語った時、神が彼の語りかけを通して表現されました。神は彼の言葉を通して彼から来ました。彼は神を語る生活、すなわち神の栄光のために神を表現する生活をしました。

ヨハネによる福音書第 12 章 49 節と 50 節で、主イエスは言われました、「わたしは自分から語ったのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、何を言うべきか、何を語るべきか、わたしに命令を与えられたからである。わたしは、彼の命令が永遠の命であることを知っている。だから、わたしが語る事は、父がわたしに言われたままを語っているのである」。これは、主が彼の務めにおいて、御父の言葉を語っておられたことを明らかに啓示します。特に、御父が彼に語るよう与えた命令は、永遠の命でした。ですから、彼は生ける言葉をもって来られました。そして彼の言葉を受け入れる者はだれでも、永遠の命を持ちます。

ヨハネによる福音書第 14 章 10 節で主イエスは続けて言われます、「わたしがあなたがたに語る言葉は、わたしが自分から語るのではない、わたしの中に住んでいる父が、ご自身のわざを行なっておられるのである」。再び、主はご自身の言葉を語っているのではなく、御父の言葉を語っていることを明確にされます。御子がこのように語っておられた間、御父は働いておられました。御子の語ることは御父の働くことでした。

### 御父のみこころを行なう

多くの時、主イエスは、ご自身の意志を行なうのではなく、行なうあらゆることは御父のみこころであると強く宣言されました。ある日、食物を持って戻って来て、彼に食べるようしきりに勧めた彼の弟子たちに、彼は言われました、「わたしの食物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行ない、彼のみわざを成し遂げることである」(ヨハネ 4:34)。主の食物は、御父のみこころを行なうことでした。ヨハネによる福音書第 4 章で、これは特に、彼の食物が罪人を救い、満足させることであったことを意味します。主イエスはある目的をもってサマリアに来られました。それは罪深いサマリア人の女を見いだして、彼女を満足させることです。これを行なうことで、彼は神のみこころを行ない、神のみこころを行なうことは彼の食物また満足でした。

ヨハネによる福音書第 6 章 38 節で主イエスは、彼が天から下って来たのはご自身

の意志を行なうためではなく、彼を遣わされた御父のみこころを行なうためであると言っておられます。ヨハネによる福音書第 5 章 30 節で彼は、ご自分の意志を求めないで、彼を遣わされた御父のみこころを求めると言っておられます。これらの節は、主イエスが彼の地上の務めにおいて、ご自身の意志ではなく御父のみこころを遂行されたことをはっきりと示しています。(新約の結論(5)、メッセージ 69)